富士道

モデルコース④
富士山に真向かう二つの町：上吉田・下吉田コース

富士に真向かう一直線の道沿いに、聖なる町と俗なる町が隣り合う

富士吉田市に入った富士道は、下吉田の辺りで南へと方向を変え、富士山へとまっすぐ伸びています。

下吉田は、大正末期から昭和初期にかけて、化学繊維の導入が進んだこともあって、織物生産の中心となった地域。織物の売買を行う絹屋町が誕生し、織物関係の商売をする人々でにぎわいました。本町通りから路地裏に入れば、今もその雰囲気が感じられます。

上吉田は富士信仰の拠点。最盛期には80軒を超える御師宿坊があり、富士講の人々に対して、お祈りの作法のレクチャー、登山の案内、宿泊・食事の提供など、様々な世話をしました。表通りを歩くと、細長い引き込み路の奥にたたずむ御師坊が、独特な雰囲気を醸しています。

コース概要

S 下吉田駅　G 富士山駅
距離：約8km　所要時間：約8時間
道路状況：基本的に舗装路
高低差：約125m（富士山に向かってやや登り）
※新倉富士浅間神社に隣接する新倉山浅間公園は398段の階段を含む登りあり
※下吉田駅と富士山駅を起点に、下吉田と上吉田をそれぞれ巡ることも可能

その他関連情報

毎月第3土曜日に開催しているオープンファクトリーでは、高度な技術で織られた織物製品の購入、ワークショップ体験、工場見学等を実施している。対象となる工場は毎月異なるので、公式サイト（https://hatajirushi.jp/home）で必ず確認の上、事前に予約をすること。

新倉富士浅間神社

平安時代に起こった大規模な噴火・貞観噴火で流出した剣丸尾溶岩に隣接する高台に建っています。人々は富士山の怒りを鎮めようと、溶岩に突き出た台地の上に立ち、御山に祈りを捧げたといわれています。本殿の前面から鳥居越しにみる富士山が、まるで鳥居が額縁となったような姿に見えるのがその名残です。また、本殿左脇の荒浜神社には蚕の神様や機神様が合祀されており、新倉地区の機屋や養蚕農家の信仰を集めました。

小室浅間神社

下吉田地区の中心に鎮座。毎年1月の筒粥祭では、800年以上昔から農作物の出来具合や富士山の登山者数を占っています。毎年9月の流鏑馬祭は下吉田地区最大のお祭りで、下吉田で織られた織物が着用されました。

吉田のうどん

織物産業が好景気だった昭和初期、機織りに勤しむ女性の手を止めないよう、男性が打ったうどんを昼食に食べる習慣がありました。男性が力強く打ったうどんは硬く太い麺となり、茹でたキャベツに甘辛く煮た馬肉を載せて具沢山のうどんとなりました。一方、富士講信者に振舞われた「湯盛りうどん」は、柔らかいタイプの吉田のうどんです。

西裏

織物取引が行われた絹屋町は東裏とも呼ばれ、東裏の商いで稼いだお金を西裏の繁華街で派手に使うことが通例となっていました。道を挟んで東側が取引を行う“昼のまち”、反対の西側が娯楽を楽しむ“夜のまち”だったのです。細い路地に飲食店街が広がっています。

絹屋町

絹織物を買い継ぐ問屋が軒を連ねたエリア。当時は毎月1と6の付く日に絹市が開催され、各地から問屋が集まって軒先で取引を繰り広げました。現在も絹屋町界隈には昔ながらの建物が多く残っており、かつての町の面影を感じることができます。

金鳥居

富士山頂までの要所に建つ鳥居の一番目に当たり、「一ノ鳥居」とも呼ばれます。商店街が連なる下吉田と信仰の町が広がる上吉田との境界に立ち、そこから先が富士山の神域となっています。

本町二丁目交差点からの富士山

御師町・御師坊

金鳥居から上宿交差点まで、独特の区割りの御師坊が立ち並んでいます。タツミチという細長い引き込み路を進み、中門をくぐると、敷地内に手足を清めるための間の川と呼ばれる水路が勢いよく流れています。

北口本宮冨士浅間神社

富士山の遥拝の地であった諏訪森に祀られています。境内は、歴代領主や富士講信者の寄進により整備されてきました。吉田口登山道の起点で、人々は境内裏手にある登山門から富士山頂を目指して出発しました。また、祭神の木花開耶姫命（コノハナサクヤヒメノミコト）は養蚕の守護神であるともされ、「養蚕守護」のお札が配布されました。

ひとあし伸ばして

ひとあし伸ばすと、明見地区の「小明見富士浅間神社」「明見湖」「大明見小室浅間神社」、富士信仰の禊場であった「愛染地蔵堂」、「山梨県立富士山世界遺産センター」「ふじさんミュージアム」といった展示施設、溶岩と木立の中を流れる「鐘山の滝」などもあります。